

再発見された『前斎院百首』について

奥野陽子

正治二年、後鳥羽院が二十三名に詠ませた『正治初度百首』は、全員の百首を収めた所謂編纂本の他に、出詠者個人別の百首歌が、家集中にあるのとは別に、単独で伝存している場合がある。『前斎院百首』もそのような資料の一つである。式子内親王の「正治百首」は、家集の最後にも収められているから、この百首歌は家集、編纂本、個人百首の三箇所で見ることができるといえる。

武井和人氏は、『式子内親王集』伝本研究の成果とともに、この『前斎院百首』についても九本を紹介し、内題と、編纂本、家集、新古今集との本文異同とから二系統に分類している。また、『前斎院百首』は、現存『正治百首』『式子内親王集』及びそれらの祖本からわかれたものではないと考えられること、第一類と第二類もその出自が異なっていた可能性が高いこと、現存の『前斎院百首』は、『正治百首』『式子内親王集』と何らか

の接触があったと考えられること、を述べたうえで、『前斎院百首』の異文は式子自身の推敲の形跡をとどめるものである可能性があるという興味深い結論を提出している。

本稿で扱う『前斎院百首』の一本は、縁あって架蔵となったものであるが、武井氏が第二類の最後に、次のように紹介しているまさにその本であるらしい。

⑨井上通泰氏蔵伝後柏原院宸筆本……【井】

井上氏『南天莊墨宝』（春陽堂Ⅱ昭5・2）に、巻頭半丁分の写真版とともに紹介されたものである。現在の所在は不明。以下、井上氏の解説文を同書より引用する。

外題萱齋院百首、内題前斎院百首御哥、所謂貼葉本（武井曰、列帖装ノ謂歟）、墨付十三葉半、一葉の大き縦八寸三分（約25・1糎）、横五寸三分（約16・1糎）

みねの雪もまだふるとしの空ながらかたへかすめるは
るのかよひぢ

を以て始まり

君が代はちくまの川のさざれ石のこけむすいはとなり

つくすまで

を以て終れり

(略伝アルモ略ス)

此一冊は余一見して後柏原天皇の宸翰と鑑定せしが更に
猪熊信男君の一覽を煩はししに同じく後柏原天皇の御筆
と断定せられき(前掲書二二九―二三〇頁)

武井氏は「掲載されてゐる写真版からも、室町期の書写と目ざ
れ、管見の限りでは最古写本である」としている。

一、伝来

井上通泰(慶応二年1866―昭和二六年1941)は、『万葉集新考』
などを著した国文学者で、歌人、医師でもあった。儒医松岡操
の三男、民俗学者柳田國男は実弟の一人である。号を南天荘
とつけた。『南天荘墨宝』解説に登場して筆跡を、井上氏の判
断を肯つて後柏原天皇宸筆と極めてゐる猪熊信男(明治一五年

1882―昭和三八年1963)は、有職故実家、古文書・古典籍収
蔵家で、書屋号を恩頼堂文庫と称した人である。本書には猪熊
信男の鑑定を伝える井上通泰のメモと覚しき一葉が添付されて
いる。

大正十一年五月十八日附猪熊信男氏来翰

百首の御歌書はまきれなく／ 後柏原院にてことに御題
書／うるはしく感じ申候

二 伸 後柏原院宸翰との御鑑定誠に敬服仕候、
井上氏の手を離れた本書は、ある時期、経済評論家、蔵書
家として知られた小汀利得(明治二二年1889―昭和四七年
1972)のもとにあった。裏表紙見返しに、「後柏原天皇宸翰」
と書かれた下に「をばま」の蔵書印が押されている。

二、後柏原天皇宸筆の再確認

本書には、井上通泰、猪熊信男両氏の後柏原天皇筆との極め
があるのであるが、特徴的な文字を拾つて、宸筆であることの
明らかなものと比較し、具体的に確認してみた。今回、宸筆と
して比較検討することができたのは次の資料である。

『宸翰英華』(思文閣出版 一九八八年復刻)所収

(1) 189 真如堂縁起 (真正極楽寺蔵)

(2) 190・191 御消息 (伏見宮蔵)

(3) 193 御懷紙 (芹屋市山本發次郎蔵)

(4) 194 御懷紙 (京都市土橋嘉兵衛蔵)

(5) 195 御懷紙 (京都御所東山御文庫御物)

(6) 197 御短冊 (新潟県保阪潤治蔵・京都市桂春院蔵)

(7) 199 御謎立 (東京都佐々木信綱蔵)

『御物宸翰』(皇室の至宝5 毎日新聞社 一九九一年) 所収

(8) 30 宸筆和歌 (宮内庁蔵)

(9) 31 宸筆和歌御短冊 (宮内庁蔵)

(10) 32 宸筆和歌 (宮内庁蔵)

(11) 33・34 宸筆古今和歌集 (宮内庁蔵)

(12) 147 詠草 (宮内庁蔵)

『京都国立博物館蔵 宸翰―文字に込めた想い―』(京都国立博物館 二〇〇五年) 所収

(13) 30 大手鑑宸翰詠草 (京都国立博物館蔵)

(14) 31 著到懷紙のうち (京都国立博物館蔵)

(15) 32 大手鑑 宸翰詠草 (京都国立博物館蔵)

(16) 33 和歌懷紙 (京都国立博物館蔵)

『泉屋博古日本書跡』(泉屋博古館 二〇〇七年) 所収

(17) 18 和歌懷紙「夏日」(泉屋博古館蔵)

(18) 72 和歌短冊 (泉屋博古館蔵)

『宸翰 天皇の書』(京都国立博物館 二〇一二年) 所収

(19) 92 詠草 (高津古文化会館蔵)

(20) 93 禁裏着到和歌のうち (国立歴史民俗博物館蔵)

(21) 94 点取和歌 (曼殊院蔵)

(22) 95 和歌懷紙 (学校法人立命館蔵)

(23) 96 真如堂縁起上 (真正極楽寺蔵)

『時代を映す仮名のかたち』(出光美術館 二〇一六年) 所収

(24) 62-2 宸翰短冊帖のうち (出光美術館蔵)

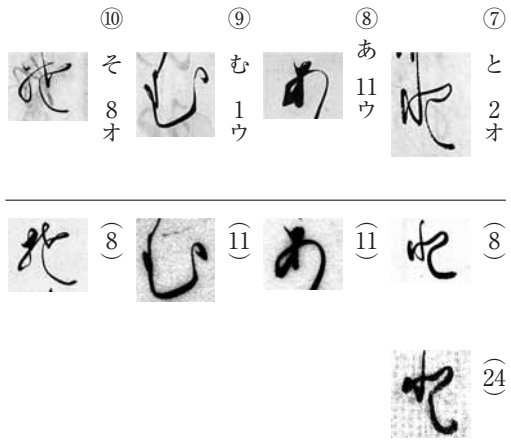
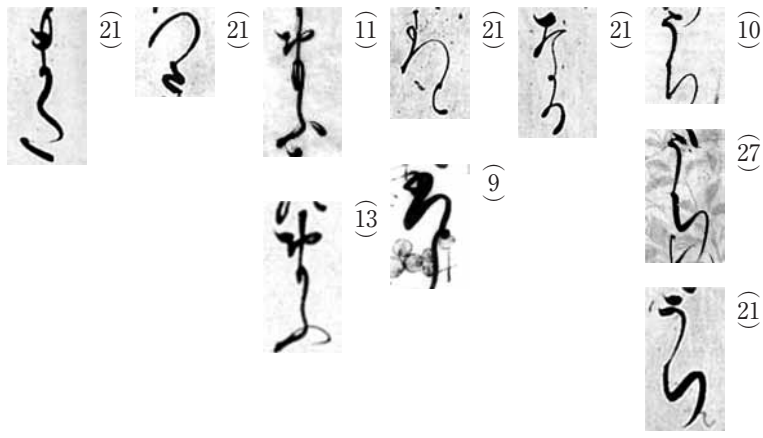
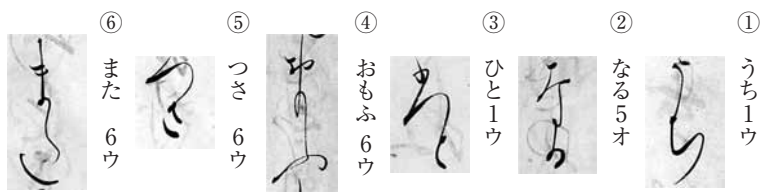
(25) 72 和歌懷紙 (出光美術館蔵)

(26) 74 懷紙詠草 (出光美術館蔵)

(27) 田中登蔵短冊

(28) 着到和歌のうち (『思文閣古書資料目録』258号)

同じ宸筆であっても、書写対象や書写時期により、文字の印象が異なってみえることがあるのは当然であるが、これらの資料の中には、本書と酷似する手跡があるのは確かである。以下、上段に本書の文字を挙げ、下段に右の資料の中からそれに酷似する例を挙げる。



これらの類似を見ると、井上、猪熊両氏の鑑定どおり、この「萱齋院百首」が第百四代後柏原天皇（寛正五年「1325」〜大永六年1526）の宸筆である蓋然性は高いと思われる。ただ、卑見では、やや気になる点があるので、今のところは留保して伝後柏原天皇筆本としておきたい。書写年代は、武井氏が写真版からの判断で室町期の書写とされていることを肯うことができる。

三、伝光厳院筆『式子内親王集』との関係

出光美術館所蔵『伝光厳院筆式子内親王集』切にはツレが四葉発見されていて、十六首あまりの歌が残る。^③古筆切れとして断片化される以前、完本であったときの『伝光厳院筆式子内親王集』を「伝光厳院筆本」と仮称し、計五葉の現存する古筆切をまとめて、「伝光厳院筆本切」と仮称する。光厳院は北朝第一代（百代目になる）の天皇（正和二年1313～正平一九年1324）なので、伝承筆者をひとまず信ずれば、「伝光厳院筆本」は「伝後柏原院筆本」よりも約百五十年ほど古い本だということになる。

今、伝光厳院筆本切と伝後柏原院筆本の該当部分を比較すると、この二本が非常に親密な関係にあることがわかる。

I 本文異同

異文はまったくなく、本文は完全に一致している。

II 一面の行数

伝光厳院筆本切七行、伝後柏原院筆本八行で、行数は一行増えている。

III 和歌と集付

双方とも三句末で改行する一首二行書で、二行上部中央に集

付を施す。

IV 字母の比較

伝光厳院筆本切五葉の総文字数は、五〇九字、うち集付の二五字は完全に一致している。本文の文字数は四八四字ということになる。伝光厳院筆本切から伝後柏原院筆本へ表記が変わっている例は二八例のみであり、九四%の字母が一致している。表記不一致の二八例の内訳は次のようである。

① 字母の異なるもの 二三例

② 漢字から仮名に開いているもの 四例

（伝光厳院筆本切）（伝後柏原院筆本）

風 ↓ 可世

春 ↓ 者流

村 ↓ 武良

雲 ↓ 久毛

③ 仮名を漢字に変えているもの 一例

（伝光厳院筆本切）（伝後柏原院筆本）

奈津 ↓ 夏

①の字母の異なる例のうち、用例の複数あるものに

（伝光厳院筆本切）（伝後柏原院筆本）

「と」 ↓ 止 ↓ 登 217 219

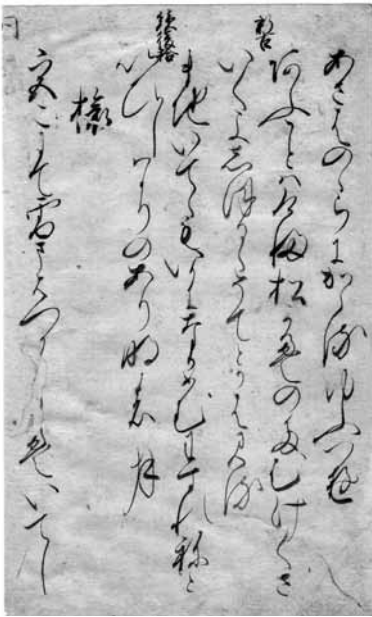
「な」	那	↓	奈	219
「み」	見	↓	美	220
				221
				222
				223

（数字は『式子内親王集』の新編国歌大観の歌番号）
 のような一定方向の書き換えがみられる。書写者が普段よく使っている仮名になつている可能性がある。②③は一行の字配りを考えた結果かと推せられる。

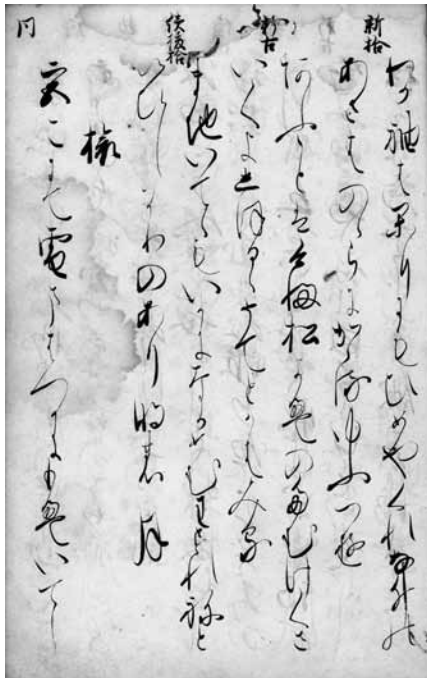
V 特徴的な字配りの酷似

I、III、IVの状況からも、伝光嚴院筆本を伝後柏原筆本が直接

伝光嚴院筆本切 注(3)の4



伝後柏原院筆本



書写した可能性の高さが推せられるが、左上下写真のような丁面の類似をみると、さらにその確信が強くなるだろうか。例えばこの旅部直前の「あり明の月」の字配りの類似は偶然とは思われない。

以上の点から、伝後柏原院筆本は一面の行数を一行増やした上で、できるだけ忠実に伝光嚴院筆本を書写したものであると考える。

これが認められれば、『伝光厳院筆式子内親王集』の切だと判断されていたものは、実は『前齋院百首』の一本の一部であったことになる。また、伝後柏原院筆本は、切られて失われてしまった伝光厳院筆の親本の全体像を推し量ることができる貴重な資料であるということになる。

四、『伝光厳院筆式子内親王集』は『前齋院百首』である

しかしながら、『伝光厳院筆式子内親王集』が『式子内親王集』ではなくて『前齋院百首』であることは、この伝後柏原院筆『萱齋院百首』本の出現をまつまでもなく、実は伝光厳院筆本切そのものからも推定できることなのであった。『萱齋院百首』はそれを確認し、その全容を示すものなのである。

前述のように式子の「正治百首」は①「式子内親王集」②編纂本『正治二年初度百首』③個人百首である『前齋院百首』の三箇所に取りめられる。主要な異文を武井氏の分類を参考にして比較した表を稿末に掲げる。伝後柏原院筆本が、『前齋院百首』第二類に属することは一目瞭然である。

注目されるのは、伝光厳院筆本切と重複する部分の異文である。前掲写真にも含まれている281番歌をとりあげる。恋部最後

に位置するこの歌は『式子内親王集』では

待ちいでてもいかにながめむ忘るなどいひしばかりの有明の
空

という本文であり、編纂本『正治百首』でも、『前齋院百首』第一類でもこれと同じであり、「忘れねといひしばかりの」は第二類特有の異文なのであった。従って、伝光厳院筆本は、伝後柏原院筆本が第二類であることをいうまでもなく、第二類の『前齋院百首』であると判明するということができよう。

武井氏は、これらの異文が式子内親王の推敲の形跡をとどめる可能性があることを指摘している。この歌においても、それは認められるのではないか。

式子の「正治百首」恋部は連作として詠まれ、強い忍びの果てにただ一度逢う恋を創作したものと考えている。^④この歌は女性性の立場の歌だが、そのただ一度逢った後の、永遠の別れとともに、男の言葉として、「忘るな」も「忘れね」もありうるであろう。その結果、女が、「有明の空（月）」を「いかにながめむ」との思いで眺めることも。どちらの場合であっても、その言葉は、相手を思いやる言葉でなければならぬ。もとより長い忍恋をしてきた男は「忘れじ」と伝えたであろう。「忘れね」——忘れてください——は、その場合、今後相手を待ち得ない女の

辛さを思いやつての言葉となろう。「忘るな」には、ただ一度の出逢いにある自分の真意を、相手の女人にも理解してもらえているとして言ったという相互性がある。推敲の結果、式子は「忘るな」を撰んだと思われるのである。

五、『射山百首和調』（林原美術館蔵）との関連

近年、原豊二氏によって『正治初度百首』の異本として紹介された『射山百首和調』と『前斎院百首』との関連について述べる。この本は、賜題目録や、『正治初度百首』の諸伝本に無い小侍従の歌「さらぬたに木曾のかけちはあやうきにかいたはしるあらしなるらん」（射山百首・冬三首目）を持つている点で注目されている。この歌は、鳥原松平文庫蔵『小侍従集別本』（小侍従の「正治初度百首」の個人百首）のみが持つ歌だということである。山崎桂子氏は、この本について特に伝本面から考察を進め、『正治初度百首』伝本系統図を再提出している⁶。

原氏論文に「個別百首」の方の資料も検討されるべきであろう」とあり、山崎氏論文では具体的に、『射山百首』と個人百首の親近性を、釈阿と小侍従の歌順の異同を挙げて指摘している。端作についても、また部立の順や表記においても、流布本系と

異本系は書式が異なっており、流布本系では「編纂時に統一的に整然と整えているが、『射山百首』は各人の詠進形態を概ねそのまま残しているようである」と言われている。私は該本を拝見していないが、原氏論文に式子内親王詠歌の翻刻が掲載され、以後北原沙友里・原豊二・山崎桂子の共同研究として、『射山百首和調』全部の翻刻が発表されているので、それらを参考に、『射山百首』と式子内親王の「正治百首」に関して報告しておきたい。

稿末の異文対照表は79箇所を挙げたが、そこに『射山百首』の欄を設けた。『射山百首』の様子は次のようである。

独自異文（●）

- 『前斎院百首』第二類と同本文である場合（◎+▽+△） 49
- 第一、二類の本文が明確に対立している（◎） 38
- 第一類に、対立本文と第二類と同本文がある（▽） 9
- 第二類に、対立本文と第一類と同本文がある（△） 1
- 『前斎院百首』第二類に対立本文があるが、第一、二類共通の本文と同じである場合（△） 4
- 『前斎院百首』第一類に同本文である場合（○） 3
- なお編纂本『正治百首』は、『前斎院百首』第一類の本文とも同じ場合が多いが、『射山百首』と同本文である場合のほとんど

どは『前斎院百首』第二類と重なっている。

この結果からは、『射出百首』は、式子内親王詠の部分についても個人百首である『前斎院百首』との関連が強く、その第一、二類本を比較すれば、第二類本との親近性を明らかに示していると言えよう。

〔注〕

(1) 「前斎院百首攷」『中世和歌の文献学的研究』笠間叢書221

笠間書院 一九八九年七月

(2) たとえば、「の」という文字は、『萱斎院百首』では、その多くが次の①のように○印の箇所筆が反されているが、宸筆の「の」字は②のように一気に筆を回しているのが普通である。また『萱斎院百首』の「月」字は③のように○印の箇所筆が一度持ち上げられているが、宸筆の「月」字は④のように筆が続けられている。



(3) 出光美術館蔵『伝光厳院筆式子内親王集』切、及びその

四葉のツレは、所収歌番号の順にあげると次のようである。

1 藤井隆蔵伝光厳天皇宸筆四半切 215～218上句

(藤井隆・田中登『続国文学古筆切入門』和泉書院
一九八九年四月)

2 出光美術館蔵伝光厳天皇筆断簡 218下句～221

(『出光美術館蔵品図録』書 平凡社 一九九二年七月)

3 武井和人蔵伝光厳院筆『式子内親王集』切(甲)

225～228上句

(武井和人「架蔵伝光厳院筆『式子内親王切』二点」

『研究と資料』第七十五輯 二〇一六年七月)

4 武井和人蔵伝光厳院筆『式子内親王集』切(乙)

279下句～282上句

(武井和人「架蔵伝光厳院筆『式子内親王切』二点」

『研究と資料』第七十五輯 二〇一六年七月)

5 式子内親王集 伝光厳天皇筆四半切

282下句～285

(鶴田大・日比野浩信『歌びと達の競演―諸家集・歌合

断簡集成』青簡舎 二〇一四年九月)

このうち、1、2、5については、武井和人「『式子内親王集』

古筆切攷」(『中世古典籍の研究―どこまで書物の本姿に迫る

か』新典社研究叢書277 新典社 二〇一五年九月)にまじ

めて論じられている。その後発見された3、4は、右の武井氏の論考で紹介されたものである。

(4) 奥野陽子『式子内親王』ミネルヴァ書房 二〇一八年六月

(5) 原豊二「池田光政ほか筆『射山百首和譚』(林原美術館蔵)について」『山陰研究』第九号 二〇一六年二月

(6) 山崎桂子「『正治初度百首』再考―新出『射山百首和譚』(林原美術館蔵)より―」『国語と国文学』二〇一九年二月号

(7) 北原沙友里「林原美術館蔵『射山百首和譚』翻刻―守覚・慈円・静空―」広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設『内海文化研究紀要』第四十六号 二〇一八年三月、北原沙友里・原豊二・山崎桂子「林原美術館蔵『射山百首和譚』翻刻―式子・讚岐・小侍従・丹後・俊成・生蓮・寂蓮―」同第四十七号 二〇一九年三月 式子の翻刻は原豊二氏担当。

『前斎院百首』異文対照表

*本文は次の諸本を参照した。

前斎院百首第一類

宮内庁書陵部蔵『百首和歌集成』二六五・一一〇五 注(1) 武井氏論文の②

鹿児島大学附属図書館玉里文庫蔵本 地六番二〇八三 同③

前斎院百首第二類

神宮文庫蔵A本 三・五〇二九 同④

神宮文庫蔵B本 三・七九一 同⑤

大阪市立大学附属図書館森文庫蔵本 九一・一四八・S H I・森文庫 同⑥

島原市立森岳公民館分館松平文庫蔵本 一三九・四二 同⑦

島原市立森岳公民館分館松平文庫蔵『哥書集 雑』一一九・六 同⑧

編纂本正治初度百首

宮内庁書陵部蔵本 五〇一・九〇九

宮内庁書陵部蔵本 四五三・二一

内閣文庫蔵本 二〇一・二六二
 内閣文庫蔵本 二〇一・二五八
 水府明徳会彰考館蔵本 巳一四
 京都大学国史学研究室古文書室蔵勸修寺家旧蔵本
 宮内庁書陵部蔵『萱齋院御集』五〇一・三三一
 式子内親王集

益田勝実蔵『式子内親王集』 小田剛編『益田勝実氏蔵式子内親王集(第一類本)』／三手文庫蔵式子内親

王集(第二類本) 和泉書院 一九八八年四月

*表記は、一部を除いてかなに開いてある。歌番号は『式子内親王集』の新編国歌大観番号。

歌番号	前齋院百首 第一類	前齋院百首 第一類	伝後柏原院本 前齋院百首	編纂本正治百首	式子内親王集	射山百首
202	あけほの	かよひち	かよひち	かよひち	かよひち	◎かよひち
204	はつかに	はつかに	はつかに	はつかに	はつかに	●わつかに
205	湖の	にほのうみや	にほのうみや	にほのうみや	にほのうみや	◎にほのうみや
215	かすみぬ	かすみぬ	かすみぬ	かすみぬ	かすみぬ	●かさねぬ
217	いつくをもなき／いつくともなく	いくへともなく	いくへともなく	いくへともなく	いくへともなく	◎いくへともなく
218	はなに	はなの／なみの	はなの	はなに	なみに	◎はなの
219	はなはちりて	はなはちり	はなはちり	はなはちりて	はなはちりて	◎はなはちり
219	はるかせそふく／はるさめそふる	はるさめそふる	はるさめそふる	はるさめそふる	はるかせそふく／はるさめそふる	▽はるさめそふる
222	わかるるに	わかれぬに	わかれぬに	わかるるに	わかるるに	●わかなくに
222	ふちなみ	ふちなみ	ふちなみ	ふちなみ	ふちなみ	◎ふちなみ

223	わけてやもらす	わきてやもらす	わきてやもらす	わきてやもらす	わきてやもらす	●わきてもやらす
223	うのはなかけ	うのはなかき	うのはなかき	うのはなかけ	うのはなかけ	◎うのはなかき
224	なきつる	ききつる	ききつる	なきつる	なきつる	◎ききつる
225	よひの	よはの	よはの	よひの	よひの	◎よはの
226	かたらふ	かたらふ／かたらむ	かたらふ	かたらふ	かたらふ	●かたふく
227	まかふ	まよふ	まよふ	まかふ	まよふ	◎まよふ
227	ともしけちても	ともしけたても	ともしけたても	ともしけちても	ともしけちても	◎ともしけたても
227	よをあかすかな	よをあかすらむ	よをあかすらむ	よをあかすかな	よをあかすかな	◎よをあかすらむ
228	ぬきみたれつる	ぬきみたれちる	ぬきみたれちる	ぬきみたれつる	ぬきみたれたる	○ぬきみたれつる
230	いまと	いまと	いまと	いまと	いまと	◎いまと
230	まくらに	まくらに	まくらに	まくらに／まくらを	まくらに	まくらに
230	かよふ／にほふ	にほふ	にほふ	にほふ	にほふ	▽にほふ
231	なつのよは	なつのよは	なつのよは	なつのよは	なつのよは	●なつのよの
233	さよふかみ	さよふかき	さよふかき	さよふかみ	さよふかみ／さよふけて	◎さよふかき
233	とこ	とこ	とこ	とこ／ゆめ	とこ	とこ
234	たま	つゆ	つゆ	つゆ	つゆ	◎つゆ
234	うきは	うきは	うきは	うきは	うきは	●うはは
234	つゆやしくらむ	たまやしくらむ／たまやちるらむ	たまやしくらむ	たまやしくらむ	たまやしくらむ	◎たまやしくらむ
235	つき	つゆ	つゆ	つき	つき	◎つゆ
236	あきかせと	あきかせを	あきかせを	あきかせと	あきかせと	◎あきかせを
237	そてに	そてに	そてに	かせに	かせに	そてに
240	あさちに	あさちに	あさちに	あさちに／あたちに	あさちに	あさちに

242	よせかへる	かせかへる	かせかへる	よせかへる／よせかくる	よせかへる	◎かせかへる
243	きぎは	きぎは	きぎは	きぎは	きぎは	●きぎの
246	あつさゆみ	あつさゆみ	あつさゆみ	あつさゆみ	あつさゆみ	●あさつゆに
246	のへの	のへの	のへの	のへの	のへの	●のへのに
249	うつなり	うつこゑ	うつこゑ	うつこゑ	うつこゑ	○うつなり
250	よなよな	くまなく	くまなく	よなよな	よなよな	◎くまなく
251	ふきむすふ	ふきむすふ	ふきむすふ	ふきむすふ	ふきむすふ	◎ふきむすふ
253	たまくら	たまくら	たまくら	たまくら	たまくら	◎たまくら
256	おもへとも	おもへとも	おもへとも	おもへとも／おもふとも	おもへとも	おもへとも
256	こよひはかりの	こよひはかりそ	こよひはかりそ	こよひはかりの	こよひはかりの	●こよひはかりは
256	くもに	くもも	くもも	くもに	くもに	○くもに
257	やまや	やまの	やまの	やまの	やまの	◎やまの
257	くぐる	くぐる	くぐる	くぐる／くるる	くぐる	くぐる
259	うすこほりつつ	うすこほりして	うすこほりして	うすこほりつつ	うすこほりしつ／うすこほりつつ	◎うすこほりして
263	しのはら	さざはら	さざはら	しのはら	さざはら	◎さざはら
264	よはの／夜の	よはの	よはの	夜は／よはの	よはの	▽よはの
265	さえくれて	さはかれて	さはかれて	さえくれて	さえくれて	◎さはかれて
265	こほりのねやに	こほりのねやに	こほりのねやに	こほりのねやに	こほりのねやに	●こほりのとこや
268	さむし	さむし	さむし	さむし	さむし	◎さむし
270	ゆきのうちも	すまゐにも	すまゐにも	ゆきのうちも	ゆきのうちも	◎すまゐにも
271	おとし	とし	とし	おとし	おとし	◎とし

273	なしに／なみに	なみに	なみに	なみに	なみに	なみに	▽なみに
273	かへる／くつる	くつる	くつる	くつる	くつる	くつる	▽くつる
276	なみにしほるる	なみにしほと／なみにしほるる	なみにしほと	なみにしほるる	なみにしほるる／そてしほるる	なみそしをるる／なにしをるらむ	●なみのしほと
279	ゆふくれ／ゆふつゆ	ゆふつゆ	ゆふつゆ	ゆふつゆ	ゆふつゆ	ゆふつゆ	▽ゆふつゆ
280	しる	みる	みる	みる	しる	しる	○みる
281	わするなど	わすれねと	わすれねと	わするなど	わするなど	わするなど	○わすれねと
281	そら	つき	つき	そら	そら	そら／つき	○つき
282	くさひきむすふ	くさひきむすふ	くさひきむすふ	くさひきむすふ	くさひきむすふ／ゆめひきむすふ	くさひきむすふ	ゆめひきむすふ
286	おしま／としま	をしま	をしま	をしま	としま／をしま	をしま	▽をしま
287	あと	みち	みち	あと	あと	あと	○みち
288	とつへきものを	とつへきものを	とつへきものを	とつへきものを	とつへきものを／とふへきものを	とつへきものを	とつへきものを
289	やまのはは	やまさとは	やまさとは	やまのはは	やまのはは	やまのはは／やまさとは	○やまさとは
290	まつみつ	まちみつ	まちみつ	まつみつ	まつみつ	まつみつ	○まちみつ
292	なみた	まくら	まくら	なみた	なみた	なみた／まくら	○まくら
293	つるの	つるの／つるは	つるの	つるの	つるの	つるの	△つるの
294	むせふ	むせふ／むすふ	むせふ	むせふ	むせふ	むせふ	△むすふ
295	はかなしや	はかなしや	はかなしや	はかなしや	はかなしや	はかなしや	い(は歟筆者注)かなしや
295	よそ	よに	よに	よそ	よに	よに	○よに
296	たつなり／なくなり	なくなり	なくなり	たつなり	たつなり	たつなり	▽なくなり
297	まつかせ	まつかけ／まつかせ	まつかせ	まつかせ	まつかせ	まつかせ	△まつかせ

299	まちみむ／まちけむ	まちみむ	まちみむ	まちけむ／まちみむ	まちけむ	▽まちみむ
300	うへに	すゑに／うへに	うへに	うへに	うへに	△うへに
300	ゐるたつも	ゐるたつの	ゐるたつの	ゐるたつも	ゐるたつの	◎ゐるたつの
300	みつのうへ／みつのい ろ	みつのいろ	みつのいろ	みつのいろ	みつのいろ	▽みつのいろ
301	なりつくすまで	なりつくすまで／なり つくすとも	なりつくすまで	なりつくすまで	なりつくすまで つくすかな	△なりつくすまで

付記 本稿を成すにあたり、写真掲載について、武井和人氏の御配慮を忝うした。

(おくの ようこ／元大阪工業大学教授)